

# 京生研基調を読んで

## ～何のために来歴と成長のストーリーを描くのか～

岩本 訓典

### 1.はじめに

わたしたちはいま、実践の自由が奪われ、子どもたちの声や要求を聞くことが難しくなってきた。

第一に、学校のスタンダード化、学力向上プロジェクトなどによって、学習規律や学校生活に対する指導法にまで、統一させていこうとする動きがあります。第二に、何でも効率を第一に求められ、問題やしんどさを時間をかけてじっくりと向き合い解決していくことを求められてはいない。時間をかけずになんでもこなしていくことが求められている。第三に、今の教育が求めている子どもは、人格の完成を目指して自立していく子どもではなく、大企業やグローバル社会で競争して勝ち抜き行く子どもである。

このような社会情勢は職場の中でも反映されている。私たちは管理職から“できる教師”として求められ、失敗から学ぶ余裕や時間を奪われていく。管理職からは、“成長していく教師”ではなく“すぐに結果を出す教師”というまなざしにさらされていってしまう。“きちっとさせないといけない”と追い込まれていき、そのまなざしで子どもたちを見てしまう。つまり、あまりにも評価に追い込まれていった先に、クラスの子どもたちをきちっとできている子、きちっとできていない子という視点にとらわれて見ていってしまう。そして、“きちっとさせようとしてもできない”教師の焦りは、子どもへ高圧的な指導に変わっていく。あるいは、もっとスタンダードをきちりさせていこうという子どもの実態や願いとはかけはなれた教育になっていってしまう。

### 2. 何のために、来歴と成長のストーリーをかくのか

このような情勢の中で、私たちは、子どもの側に立って実践を進めていくことはとても困難である。この答えを示してくれたのが、今年度の京生研の基調であると思う。

『何のために、来歴と成長のストーリーをかくのか？』この答えについて、考えていきたい。

#### (1) 自分がぶれないため

その答えの1つ目は、自分がぶれないためである。私たちは、日々起こるトラブルや学習、行事の準備などに追われている。忙しい日々の中で、知らず知らずのうちに、学校的な管理主義、競争主義に囚われてしまう。そうすると、最も課題の大きな子(=K)を実践の柱として取り組んでいくことが難しい。できる子をどうやって作っていくのか、できない子は、「どうしたらいいのだろう？」や「おうちの人に頑張ってもらおう」で関わらずに終わってしまうことがある。

また、K に対する取り組みは、子ども集団や教師集団からも良くは見られないこともある。また、K を理解して関わることのできる子もいない。そのために、K に対する実践がなかなか思うようには進んでいかない。周囲からの「K がちゃんとしてくれない」「K ってやばくない」という声に教師はつぶされそうになり、K に対して「怠けている」という見方を強めていくことになる。決してKは「怠けている」のではない。「できない」には、必ずその理由がある。まずは、「なぜできないのか？」を分析していく必要がある。その分析の際には、K が発達の課題をどのように獲得してきたのかを考えることが大切である。それが、来歴と成長のストーリーを書く意味ではないかと考える。

## (2) 自分を守るため

二つ目の答えは、自分を守るためである。K に対する実践は、周囲から理解され難い側面を抱えている。管理職からの評価も得られにくいこともある。どうしても規律や学力向上を学校の最優先課題として捉えられている学校が多い。管理職からの評価はどうしても良いといっても、あまり理解されていないと、実践が自由にできない。K のための取り組みが頭ごなしに潰されてしまうこともある。頭ごなしではなくても理論的にやさしく取り組みの自由を奪われていくこともある。その結果、職場での実践の仲間を失いかねないことも出てくる。しかし、来歴と成長のストーリーをしっかりと描くと、それをもとに、K への取り組みを仲間に広げていくことができる。実践が行き詰っても、それを見直し、修正することで方針を見失ってしまうことはない。

## (3) 実践の希望を失わないため

三つ目は、実践に希望を失わないためである。実践が行き詰ってしまっても、来歴と成長のストーリーをもとに何度でも方針を出していくことができる。もし、ストーリーを描けていなかったら、方針を出し続けていくことはできていないであろう。そうすると、やはり、K を中心としたスタンダードに対峙する実践ではなく、スタンダードな実践で K を何とかしていこうと思っていくのかもしれない。できないのは K の努力が足りないからという自己責任論を掲げてしまうかもしれない。方針は希望でもあると思う。K の「できない」の裏側にあるできない理由を分析により探り出すこと。そして、「本当はできるようになりたいけど、できない」もう一人の自分を紡ぎ出していくことがあり、その先には、仲間と共に頑張っていく方針が大切なのではないだろうか。そこには、K だけではなく、現代の社会の課題を変えていく希望の方針をつくっていくことができるのではないだろうか。

## 3. おわりに

来歴と成長のストーリーを描くことで、この1年間の学級づくりだけではなく、K が卒業して成人してその後、歩んでいく人生まで見越した支援を考えていく必要があるのではないかと思う。卒業して次の学年に任せるというものではなく、K と共同していく子ども集団づくりを構想し、さらに、K や K の母が地域にどのように理解されて、どのようなつながりを持てるのかという視点も大切になっていく。というのも、母や家庭への支援が担任や学校が変わってしまうと、止まってしまうことが予想される。引継ぎを丁寧に行うが、「そこまで学校としては面倒を見ることはできない」という言い分で、学校から K への関わりが希薄にされてしまうこともある。そこで、福祉との連携をしっかりと行い、K の親への支援を継続していくことが大切であると考え。

このように考えると、来歴と成長のストーリーを描いていくことは実践を進めていく上で必要不可欠なものであり、K や K に取り組む教師への希望のストーリーになっていくものだと考えても良いと思う。描き切ることも大切であるが、描こうとしていくことが最も大切なものではないかと思う。